

『日本英学史の研究』昭和十四年刊、三五―四〇ページ参照。この編纂には前田正名も参加した。高橋新吉は明治三年アメリカ留学、後大蔵省にいきり、また領事、九州鉄道社長、勸銀総裁、男爵。

鯨島武之助。嘉永元年（一八四八）―昭和六年（一九三一）。後アメリカ留学、慶応、外交官、第三次伊藤内閣書記官長、貴族院勅選議員。

青江秀、『薩摩煙草録』（明治十四年刊）、『大日本帝国駅通志稿』（明治十五年刊）の編者

爪生震、嘉永六年（一八五三）―大正九年（一九二〇）。越前藩士、何礼之塾に学んだ後、坂本竜馬の海援隊に入る。明治四年、工部省鉄道寮に出任、岩倉使節一行に参加三年在欧、後退官して高島炭鉱会社にいり、後年大日本製糖、キリンビール等の重役となって財界で活躍した。

右のほか、何礼之の私塾入門者の前掲名簿には陸奥宗光をはじめ、高峰讓吉（医学）、萩原三圭（医者、東京大学教授、山口尚芳（貴族院議員）、芳川顕正（伯爵、政治家）、高良二（医学、九州帝国大学教授）、栗野慎一郎（子爵、外交官）等がいた。

(11) 古賀十二郎『西洋医学伝来史』（昭和十七年刊、二四六ページ参照）

(12) 『鴻爪痕』三「逸事録」九七ページ「翁の名の由来」参照。

(13) 爪生寅、越前藩士、字は三寅、京都にて新宮源庭に医学を学び、真野堅次に蘭学を学ぶ。それから長崎に赴いて何礼之に英語を学んだ。前島密の「自叙伝」にその名がみえるほか、何礼之の「公私日録」（第三冊、文久四年三月十二日の条に「爪生三寅弟頼吉今日拙家へ滞留食客ナリ」とある。その後越前藩に用いられ、明治となって大学少博士、文部六等出仕、大蔵五等出仕となり晩年は実業界にはいった。大正二年没、年七十二。著書「交道起源、一名万国公法全書」（明治元年刊）、『合衆国政治小学』（明治五年刊）、『啓蒙智恵之輪』（明治五年刊）、『改正日本国尽』（明治七年刊）等。

(14) 『鴻爪痕』三「逸事録」の一七「翁と星亨」参照。何礼之のこともある。

(15) 『男爵安倍清康自叙伝』、安倍清種編、内容「大尿略誌」、「備忘略誌」、辞令、「海

註

- 書かせた)ものか。それにしても典拠となる記録類があったのかもしれない。いずれにしても幕末英学史の貴重な史料となる。
- (6) 唐通事は、清国との貿易事務に当るもので、広狭の組織があり、狭義のものは大下通事、稽古通事等で、それに家系、尊卑の別があった。広義のものは唐年行司以下を併せたものである。中村質「近世の日本華僑」第四章(福岡ユネスコ協会編『九州文化論集』二「外来文化と九州」所収)参照。
- (7) 前島密遺稿『鴻爪痕』大正九年四月刊、市島謙吉編、非売品。本稿関係は一の「白叙伝」である。
- (8) 古賀「長崎洋学史」上巻、一九九ページに「文久二壬戌(一八六二)に至り、この英語伝習所は、片瀬郷組屋敷内の乃武館のうちに移され、改めて英語所といひ、中山右門太が頭取を命ぜられた。公文書に〈英語稽古所〉とある。中山右門太は、文久二壬戌四月廿九日、官船千歳丸の上海渡航の折、英学修行のためと云ふので一行に加はり、同年七月帰朝した」とある。これは何礼之史料にはみえない。
- (9) 『鴻爪痕』一の「自叙伝」四三〜四四ページ。
- (10) 何礼之の「履歴」および「公私日録」に掲出の何礼之塾の入門者の薩摩藩士その他の略歴を摘録しておく。
- 前田弘安、後前田正名、薩摩藩士、嘉永三年(一八五〇)〜大正十年(一九二一)。後に内務、農商務省官僚、また民間で勸農事業を行ったので著名。男爵、この前田は若い頃長崎で何礼之塾に学んだ後、高橋新吉の薩摩辞書編纂に参加協力した(後述)。そういう点で明治初期英学に貢献者の一人。
- 白峰駿馬、天保七年(一八三六)〜明治四十二年(一九〇九)。越後長岡藩士、鶴殿瀬左衛門三男、脱藩して白峰駿馬と変名。京都から江戸に赴き勝海舟の門に在り、また長崎に遊学何塾に在り。後一時坂本竜馬の海援隊に在り、坂本遭難に立会う。明治初年渡米、造船学を修め白峰造船所を創設した。
- 高橋新吉、薩摩藩士、天保十三年(一八四二)〜大正七年(一九一八)。何礼之塾で学んだ後に同地でフルベッキの援助で、いわゆる薩摩辞書を編纂した(豊田實著

なった。

林謙三と鹿児島に同行した橘恭平についてはその出身経歴は一切不明である。何礼之の「公私日録」元治二年、すなわち慶応元年正月十一日の条に「橘恭平被参入塾之義被談」とある。すると入門後間もなく鹿児島に赴いたのである。前島密の「自叙伝」によると、明治以降、神戸郵便局長となったが脳病で亡くなった。

むすび

本稿は幕末長崎時代の何礼之の英学とその英学塾について若干考察を加えたのであるが、関係史料が乏しいために、その実態については後日の調査に残すところが多かった。

何礼之塾は、長崎に集る多くの諸藩の洋学書生を収容して、三百余名の内外塾生があったという「履歴」の記載は若干誇張があったとしても大変な数である。また、上記のような多くの英才を輩出した点においても注目すべきものがある。その実績は、幕末蘭学における緒方諸庵の滴塾、伊東玄朴の象先堂、佐倉の順天堂と対比すべく、また同じ英学においては江戸の福沢諭吉の慶応義塾と東西相呼応するものであったと称してよろしかろう。にもかかわらず、明治以後殆んど忘却され、幕末洋学史の上にほとんどその名を留めていないのは、きわめて短期間で中絶し、その跡が離散したためであろう。塾主の何礼之が塾を捨てて東上したことはこの塾の生命を断つことになった。しかし、これは幕命という当時の至上命令によるもので何礼之としても如何とも為し難いこと

であった。慶応年間ともなると長崎は西域の地方都市となってしまい、また幕府は政治的衰運を転回すべく首都の江戸に新文化の粋を集中しようとした。何礼之もこの幕府の江戸充実政策の一コマに選ばれたのである。

これは何礼之その人にとってはやはり得難い栄達の道であったので、喜んで受けたのであろう。何礼之は後に元老院議員、貴族院職員となったほどの練達の人物であって、やはり非地方的の中央志向型であった。この幕命を機会に中央に進出し、明治初年には、多くの価値ある翻訳を行って日本の新文化建設には多大の貢献をなした。地方私塾の経営を超えたより大きな文化的事業を行ったのである。

なお、本文最後に若干鹿児島英学の発祥に触れたが、これは紙数の関係から何礼之塾との交流を略説するにとどまった。本来、元治元年開設の開成所の由来を述べなければならぬが、それらは一切省略せざるをえなくなった。しかし、これは前記した拙稿「幕末の長崎と上野景範」に、上野景範文書を紹介しつつ書いておいたから、それを参照されたい。関係文献も書いておいた。該拙稿と本稿とは姉妹編であるから願くば併読を願いたい。つまり該拙稿の後半が本稿の「むすび」となるわけである。終りに臨んで、何初彦教授が貴重史料を提供して下さいたのに対して深甚の謝意を表します。

(昭和五十二年十二月八日脱稿)

下野して鉄道事業その他に従事、男爵となる。大正六年没、年六十九。このように、英学とは関係がない。しかし、鹿児島英学の創業に与った功績は英学史に抹消できないのである。

前掲した前島密の「自叙伝」には、培社の書生の林清康と橘恭平の二名を助教とし鹿児島に呼びよせたとある。この林清康は何礼之の「履歴」慶応元年の条にみえるように後の安保清康、海軍中将男爵である。この安保清康には『男爵安保清康自叙伝』がある。¹³ 自叙伝は「犬尿略誌」と題し、活字組九〇ページの回顧録、それによると、安保清康は備後国郷調郡向島西村の医家林金十郎宗清の四男、名は謙三、後本姓の安保に復し安保清康となった。薩長の生れでなく、また医家から海軍のほうに進んだその経歴はまことに波瀾に富んでおり、この「犬尿略誌」はこの閩外の有志家が時流を乗りきる記録としてなかなか面白い。ここで詳しく紹介をする余裕はないが、長崎の何礼之塾にはいった経緯は一応調べてみる必要がある。

はじめ林謙三は、家業の関係から藩医の龍神紹庵に医を学んだが、意に満たずに、長崎に赴いて、同地の医師谷川春道の門にはいった。これは西洋医学の本場を踏むためであった。万延元年（一八六〇）、この長崎で、蘭医ボンペについて西洋医学の本格的学習を行ったが、これは当時の西洋医書生として最高の門にはいったわけである。このとき十九才、それから自ずと外国の事情に目を開かれ、ついに一朝、蘭書を捨てて英書を読み、海軍術を修めるようになった（「履歴年表」万延元年条）。これによると、医学から、海軍への転換は万延元年（一八六〇）のことであった。そのつぎの文久元・二年は「年表」は空欄であっ

て、「犬尿略誌」も一般政情のことがあるのみ、「年表」の文久三年には「謙三長崎に在りて勉学益々努む」とあり、翌元治元年も「長崎に在りて勉学の外余念なし」とあるのみである。ところが、その翌慶応元年の条には「謙三はより先、何礼之助氏の塾に在りしが……」とあるから、文久年間に何礼之塾に入塾していたのである。そこで何礼之の「履歴」をみると、林謙三は前掲したように文久四年の私塾開設の際の入門となっている。恐らくそうであって、それ以前は英語稽古所で学んだものか。

「犬尿略誌」には

「慶応元年、余ハ同志ト何礼之助氏ノ門ヲ退キ、爪生三寅兄弟、巻退蔵、橘恭平、高橋顕正其他五六ノ学友ト寺院ニ寄宿シ、日夜宿食ヲ忘レ骨血ヲ絞リ、肺肝ヲ碎キ汲々苦学ス、巻氏島津侯ニ聘セラレ鹿児島ニ到リ開成所ニ於テ英書ヲ生徒ニ教授ス。余ハ或日、氏ノ書信ヲ落手シ披キ見ルニ橘恭平ト同行。一時鹿児島ニ来リ教授ヲ補助シ、学資ニ充テヨ云々トアリ、余等欣然之ニ從ヒ渡鹿セリ、氏ハ元越後高田ノ人ニシテ、長崎留学中何礼之助氏ノ塾ニ同居ス。即チ現今ノ前島密氏ニシテ駅通総監トシテ内外ニ其名ヲ輝カセリ、高橋顕正ハ子爵芳川顕正氏はナリ。」

林謙三と橘恭平とが長崎をでたのは何時か、これは書いてなくはつきりしないが、慶応元年のことで、前島密が授業をはじめてしばらくの後、同年中頃のことであろう。前記「履歴年表」はその転載である。林謙三は後安保清康となり、兵部省にいきり、一旦陸軍省にはいったが後海軍に転じ、累進して海軍中将、佐世保と呉の鎮守府長官を歴任、男爵となり、明治四十二年、六十八才で亡く

前島密はこのようにして鹿児島に赴くこととなった。何礼之の「公私日録」にはこれと照応する記事がある。すなわち元治元年十月十七日の条に

十七日、晴、巻退蔵薩州支御雇之趣ニ而今日引取

すなわち赴任の前年十月にはすでに鹿児島行の話がきまっていた何礼之塾から引取上っている。ついで翌慶応元年正月十四日の条には

十四日、雨、巻退蔵薩州へ罷越候ニ付、暇乞ニ而被参候ニ付、雑煮出シ、為酬別長崎たはこ五ッ進ス

とある。「自叙伝」の記載と同様、慶応元年正月、長崎から鹿児島に向った。

これで、前島は何礼之塾を去るのであるが、これで、何礼之塾の英学が鹿児島へ分派、進展したことになる。「自叙伝」の「鹿児島行」には

「慶応元年正月初旬、薩藩の汽船に乗り、鹿児島に到る(船中西郷南州氏に会したるも波高く時間少くして時事の談話に及ばざりき)。鹿児島に到れば待遇頗る鄭重なり。然れども生徒の数は日を経て多きに過ぎ、学事に周到の注意を欠きたるを以て、長崎に於ける培社の書生、林清康、橘恭平両名を余が学生の名を以て呼寄せ助手と為したり、因に林は後に安保と改称し、海軍中將に任じ、男爵に叙せられ、橘は神戸郵便局長に任じたれども脳病にて斃れたり。

余は鹿児島に在留する殆ど一年、小松太夫(帯刀)等国老の招きを受くる数回に及び、且つ其他の志士と接して藩情を問ひ、共趨勢を察するに大勢討幕に決せるが如し。」(四七ページ)

前島は元来、政治的の志士肌で、語学の学習は世界の大勢を知る方便にすぎなかった。しかして薩藩が企てる討幕計画には「某討幕や現状に照せば敢て否

議すべきにあらざるも、或は為に大禍機を促し、帝国の存亡に関する患難を生ずるも未だ識るべからず」と、批判的であった。そういう点から幕府をして日本の大革新を行わしめようとする親幕派であった。そこで薩摩の藩情を親しく観察したうえはなお鹿児島に留ることの無用を覚知し正一カ年の勤めをはたし、同年十二月朔、鹿児島を去った。「自叙伝」には「多数の書生は別を送りて、三里外の某村に到り、再び盛なる宴を開き、特に惜別の歌を造りて合奏せり」とある。このような別をして江戸に帰った。

「自叙伝」は、志士としての経歴が主で、鹿児島滞留一カ年の間の記事も志士的面が主で、開成所における英学その他の教育の実況については前記の程度で、英学史的研究の面からすると「自叙伝」の記載は遺憾の嫌いがあるが、これは元来が前島は英学者よりも天下の志士を以て任じていたのであったから、致し方はないのである。しかし、勤務も慶応元年正月から、同年末まで一カ年に近く、また去るに際して授業生から深い惜別の情を寄せられているから、鹿児島開成所に対する寄與は少なくなかったであろうと思われる。前島は江戸に帰ると翌三年三月、幕臣の前島家をついで前島来輔となった(後密と称す)。しばらく英、漢書の塾を開き、星亨らが入門した¹⁴。ついで八月、幕府の開成所の反訳方となった。

前島密のその後は、英学、英語教育とはまったく離れ、幕府の兵庫奉行下で兵庫開港の事務に従事するなどし、明治維新後も旧幕府に勤仕して官軍迎接役となり、江戸遷都論を唱え、後、新政府の民部省に出仕した。明治四年、駅遞頭となり、郵便制度の創始を主宰したことは著名である。内務大輔となり、後

何礼之の門にいらなくなったのか、これが前島密、すなわち巻退蔵の英学についての問題点である。前島の「自叙伝」の記述はやや簡略であるが、文久二、三年頃は長崎に来ていて、何かの機会に何礼之を知ったのである。その機会はずぎのような一件のためであった。何礼之は既述のように、文久三年の暮れに江戸幕府当局から遣欧使節池田筑後守一行の随員を命ぜられた。その際に従者一名が必要になったが、かねて外国行を志望していた巻退蔵の前島密がこれを志願してただちに許された。この一件はその「自叙伝」にあるが、これが巻退蔵の何礼之に知られる機会となったものと思われる。何礼之は巻退蔵の人物を知り、互に会悟するところがあつたろう。そこで何礼之は、私塾の開設に当つてこの人物を塾長に選んだ（本文の三に「自叙伝」を引用したから参照）。

このようにして巻退蔵は何礼之の信頼する門弟となった。この「自叙伝」の記事につづいて「培社」設立の話がある。この培社が何礼之塾生と鹿児島開成所との接触の媒介となるのであるから、以下「自叙伝」の当該部分（「無謀にも洋行を企つ、付培社の開閉」）を引用しておく、なお、この培社のことは何礼之の「履歴」、「公私日録」には記載なく、前島の「自叙伝」にのみあることである。

「然れども、氏（何礼之）は多用にして授業の暇少く、余も亦寄食するの憚多きを感じたり、当時遊学生中、資力足らずして困難を感じず者鮮からざるを聞き、彼の為に少費の合宿所を設け、互に相救ふの急なるを思ひ、爪生寅氏に其所長と学長とを依頼し、何先生には其所以を談じ、明諾を得て培社と称する学舎を開設せり。」（四四ページ）

これによると培社と何礼之塾とは別の、何礼之の門人の爪生寅⁰³を所長とする英学書生の合宿所で何礼之塾の外郭的なものであったらしい。

「培社は薩州某寺の空堂を借りて之を用ひ、一僕を雇入れて炊事に当らしめ、余は社の財政に任ずべしと定めたり、然るに斯の如き義社に於ては収支相償はざるは蓋し皆然らん。況んや一の寄附無く、赤貧の余がその財政に当るに於てをや。故に開設後数日ならずして余は私物を売却して米商に払ふの苦境を現ぜり」（四四ページ）。

このような開設と同時に起こった財政的窮状のところに鹿児島から思わぬ要請が来た。それはこの培社の一員である鹿児島書生を介してであった。

「此時、薩州藩士鯨島誠透氏（培社に来学の人）一日薩藩の命を帯び、余に談じて曰く、弊藩は近頃鹿児島に開成学校を開き、英学を主として生徒を教育せんと欲す、然るに其教授及督学に任ずる人を得ざるに当惑せり、足下幸に此培社を捨て、鹿児島に來り之に任ぜられよと」（四五ページ）。

巻退蔵の前島はこのその任にあらずと、ただちに要請に応ずる気はなかったが、これはあなたの学力を知るからで決して長逗留を強いけない、また一両年中には他よりその人を得るであろうから、それまででよろしいと再三の説得をした。またわが藩人となって何処へ遊学するとも君が欲するままに任ずべしと、懇切な招聘に心が動き、また薩摩藩が有為の雄藩たるを知るゆえ、わが志を達する一方法にもならんとこの召令に応じた。その結果慶応元年正月、薩摩藩の汽船に乗じて鹿児島に向った。なお、培社は経営困難のところに所長爪生寅が金銭上の不始末を行ったことなどで開設後長つづきせずして閉鎖となった。

の諸藩が伝習生を送っている。何礼之塾はそういう長崎の土地柄をあてこんだものであったが、また、塾主その人の優秀さから著名塾となって各地方から多くの書生を集めた。このようなことで、長崎は東日本の江戸と並んで、西日本における英語学習の本場となり、多くの藩と本家分家の関係ができていた。とりわけ薩摩藩の鹿兒島とは関係密なものがあつた。これは何より、幕末の同藩が島津斉彬の西洋文物の積極的な摂取政策を推進したこと、また地理的にも九州の南端と西北部と近接の関係にあつたことなどからである。そこで、西洋関係では江戸大坂よりまず身近かな長崎となつた。はやく文政年間頃に、松木弘安（寺島宗則）の父松木雲徳が遊学してシーボルトの教えをうけている。¹¹ いよいよ幕末となると前述したように上野景範が安政三年以降となつて遊学を重ね、それが幕末の鹿兒島英学が発祥するいわば導火線の役割をなしたのであるが、その後、薩英戦争以後の積極的な親英開明政策による元治元年設立の開成所には藩外の巻退蔵（前島密）、林謙三（安保清康）らによる長崎英学の導入が大きな貢献をすることとなつた。しかし、この巻退蔵はいずれも何礼之の恩のかかつた長崎英学徒たちであつた。

前島密は、わが国郵便制度の創設者として著名である。遺稿集に『鴻爪痕』があり（大正九年四月刊）、そのはじめにある「自叙伝」に生い立ちから、長崎遊学、何礼之との関係、鹿兒島行の記事がある。前島側の何礼之との関係資料はこの「自叙伝」しかないから、以下これをしばしば引用するであらう。こまかな経歴は抄略するが、生い立ちを略記すると、天保六年（一八三五）正月七日、越後國中頸城郡津有村に生れた。何礼之よりは五才の年長である、もと上

野氏、幼名房吉。父は豪農で学問もあつた。叔父の藩医相沢文仲に養われて漢方医学を学び、相当の地方的教養をうけ、弘化四年（一八四七）、江戸に遊学し、それから苦学して西洋医学を学んだ。この時期は江戸でひたすら孤軍奮闘して学問にはげんだので、その辛苦のことは「自叙伝」にある。翻訳物の筆耕をしながら、オランダ式の兵式、あるいは西洋の事情を知って世界の大勢に目を開かれ、たまたまペリーの来航に際会していよいよ国防の急なることを痛感した。このとき旗本の設楽弾正なる人物を知り、この人から英語学習の要を教えられた。これが前島密の英学の訪緒である、曰く「凡そ国家の志士たる者は、英国の言語を学ばざるべからず、英語は米国の国語となれるのみならず、広く亜西亜の要地に通用せり、且英国は貿易は勿論、海軍も盛大にして文武百芸諸国に冠たり、和蘭の如きは萎靡不振、学ぶに足るものなしと。余は其教示に依て将来の方針を變じ、専ら英語を学ばんと決心せり」（二二ページ）これは幕末の蘭語時代去り、英語に対する認識勃興を語る資料としても面白い。前島密はそれからさらに北方の函館に赴くのであるが、これはその地にいた海軍、航海術の大家武田斐三郎の門にいたるためで、このとき、巻退蔵と名を改めた。¹²

函館では同地の塾にいり、武田斐三郎に師事して、航海術を学び、函館丸の測量役などを勤めた。このように、前島密の修業時代はまことに波瀾万丈である。万延元年の暮に江戸に帰つた。翌文久元年（一八六二）にはロシア軍艦の対馬侵略の占拠事件がおこり、巻退蔵の前島密が、対馬派遣の幕吏（外国奉行組頭の向山栄五郎）から随行を命ぜられ欣然これに従つた。このとき、対馬に向う途中、長崎にしばらく繫留した。この巻退蔵がどうして長崎に一時居を据え、

何礼之の実力はどのような程度であったのか、前掲したように、通訳、読書も自由であったという。その語学力はさらに明治以降の数多くの翻訳が検討の好資料となるわけであるが、これは他に適当な判定学者があると思われるのでここでは言及をしない。ただその門人の指導がきわめて懇切であったことについては、前島密の「自叙伝」のうちに下記の記述がある。「余は茲に何氏に對して深厚の謝意を表せざるを感ず。先生は終日、霜路を歩みたる疲労を忍び毎夜熱心に英語を教授せられ、余も亦之に感激して燈下に三更を過したること稀ならざりしが、……」。これは開塾以前の話であるが、何礼之が教師として熱意のあった人であったことが察せられる。

何礼之のその後の係歴は、「履歴」によると三年七月、開成所教授並となり十一月、軍艦役主格海軍伝習生取締。また江戸で開塾して入門者には星亨、上取忠良、中村六三郎らがいた、ついで王政復古後、勝安房の外交交渉の通訳を勤め、明治政府となってから新政府の開成所御用掛、ついで大阪で開塾した。その後明治三年七月、大学少博士（大阪洋学校務取締）、四年七月、文部少教授となったが、十一月免官、岩倉使節に外務省六等出仕（通訳）となって随行した。

「履歴」によると、この随行中、外交談判の通訳に當ったほかに木戸孝允に随伴して政治関係の調査を行い、また哲學博士タイレルの指導をうけて、その勸告でモンテスキューの『法の精神』の翻訳を行った。これが後に『万法精理』として刊行された。木戸一行とともに帰朝し、大使事務局、ついで内務省出仕台湾蕃地事務局御用掛等となり、主として翻訳、調査等の事務に當った。學者

官僚である。ついで元老院議員となった。

そこで長崎英學所のその後はどうなったのか、古賀氏の『長崎洋学史』（上巻）に簡明な記事があるのでそれを付記しておく。

元治元年（文久四年）正月、大村町に語學所を設け、英、仏、魯三ヶ国の語學が教えられることになり、何人も語學熱心の者は入学が許されることになったが、この大村町の語學所落成開校に至までは江戸町の仮語學所が用いられた。翌慶應元年八月に至って、この仮語學所は新町の元長州屋敷跡に移り「履歴」記載のように、慶應元年（一八六五）濟美館となり、外国語以外、歴史、地理、物理、經濟などの諸學科をも開始し、また尔後、洋書の取締方もこの濟美館において行われることとなった（従来は運上所において取締に當った。これは輸入事務である。英語はフルベッキ、何礼之助、平井義十郎、横山又之丞、柴田大介、柳屋謙太郎、岡田誠一（後好樹）、玉名純之助、島田種次郎（胤則）、西三保太郎、藤岡雄之助、松尾孝太郎、伊寅太郎らが教えた。これがさらに明治元年二月、新政府の長崎奉行所接收によって広運館と改稱された。三年には東京の大学の所轄となり、ついで文部省管轄の官立専門學校長崎外国語學校、長崎英語學校となつていった。

四 前島密の鹿児島行

長崎の何礼之塾には薩摩のみならず九州、四国、遠くは加賀の書生が集つていた。これは長崎が依然、鎖国の窓的地位を保持して、各藩の洋學書生にとっては憧憬の地であったからである。安政年間の海軍伝習所にも薩摩その他

ヲ謀ル」と塾舎新築のことがみえる。

「公私日録」にもこれに照応する記事がある。

閏五月十六日、拙家私塾立家地裂して本学寺々来祈禱○拙家入門生徒相増候ニ付服部侯へ願立、浦手へ私塾取建請_テ普料金九拾九両、拾ヶ年賦ニ拜借、無所御出方

奉行からの援助は九拾九両という大金である。塾はこれで准奉行所立、つまり准官立といってもいいものとなった。この新築は同月二三日には梁上げをしている。「履歴」にはこの年(慶応元年)の主要な塾生として左の名簿が載っている。

薩摩 前田弘安(前田正名) 原田莊助 白峰駿馬(實ハ越後長岡) 錦戸広

樹(陸奥宗光、当時薩摩の士を称した) 谷村小吉 岸良俊之丞(兼養)

川崎強八 高橋四郎左衛門(高橋新吉) 鮫島武之助外数十名

加賀 高峰讓吉 芝水昌之進外二十余名

土佐 野村絹章 萩原三圭外十余名

肥前 山口範三(山口尚芳) 牟田 豊 野田益晴外数名

阿波 高橋顕正(芳川顕正) 山田要吉 高良二(蘭医高良斎の子)外十数名

筑前 井上良一 本間英一郎 栗野慎一郎其他

其他熊本、久留米、柳川、松前等ノ諸藩及地役人子弟併セテ塾生百数十名、塾外生二百名算ス

これによるとまことに多士済々で、前島密らのほかに前田正名、芳川顕正、高橋新吉、白峰駿馬、高峰讓吉らがおり。また長崎流遇中の陸奥宗光も一時こ

の塾に身を寄せていた。また塾生の数も多い。「公私日録」には右のような塾内外生の名簿は見当たらないが、それに照應する左の薩摩藩子弟の入門記事がある。

四月十二日(慶應元年)、晴、薩州藩白峰駿馬 原田宗英 前田弘安 渡辺 出雲入塾金貳百疋ツツ

五月朔、晴、神供○薩州聞役汾陽次郎左衛門同藩入門挨拶として来訪

五月十九日 薩州谷村小助 加州明石格庵入塾

以上が何礼之史料によるその私塾設立の経緯である。塾設立とともに奉行所の支持をえたことはいわば奉行所公認である。このような扱いをうけた真相はわからないが予じめ奉行との話合いで設立をしたものと考えてよからう。或いは諸藩書生收容の語学校として特設されたものかもしれない。

右のような事情で、設立早々塾生三百余の大塾となったが、永読きせずわずか三ヵ年という短期間で終った。その間の経過は、これも「履歴」は簡単に、慶應元年(一八六五)には何礼之が奉行の命で『英国海兵陸戦隊操典』を訳したこと、また「長州藩邸ノ跡ニ学校ヲ建テ済美館ト号シ、英学ノ外始メテ佛語独乙語ノ専門教師ヲ聘ス」という記事があるだけで、つぎの二年は空欄、その翌三年の条は「幕府ノ命ニ依リ入洛云々」とあって何礼之は突如長崎を去り、さらに江戸に赴いて、幕府の開成所教授並となっている。つまり、江戸の開成所に引っこ抜かれたのであるが、これで長崎の何礼之塾は中心の塾主を失うことになり、その後はどうなったのか。自然閉鎖となったのであろうか。

以上で長崎時代の何礼之は終りを告げる。そこでこの時代の英学者としての

った。⁽⁹⁾

三 何礼之英学塾の開設

長崎における英学者何礼之の業績として最も注目すべきものは英学塾を営んで多くの人材、英学書生を育成したことである。ところがこの何礼之塾の存在はほとんど忘却されて英学史からは抹殺されてしまい、たとえば古賀氏前掲『長崎洋学史』にも何ら記載されていない。私も『鴻爪痕』によって辛じてその存在を知るのみであった。ところが今回、何家の文書「公私日録」、「履歴」調査の機会をえて少しくその概畧を知りえた。しかし、何家の史料も断片的なもので、その全貌を尽すまでには至らない。しかし、その片鱗は明かとなった。そこでこれを以下紹介しよう。

「公私日録」 元治元年（一八六四）五月朔の条に英語稽古所の校舎移転の記事がある。

一、是迄立山御奉行所長屋借請英学校ニ相成居候処、手狭ニ付江戸町是迄五ヶ所会所、当時産物会所此節借請当分仮英学校ニ相成明日合稽古相始ル

また「履歴」の元治元年には

四年（文久四）、学生漸ク増シ、校舎狭隘ヲ告ク、依テ校舎ヲ江戸町活版所跡ニ移シ、尚自邸ニ私塾ヲ開キ以テ後進ヲ教養ス

と、同様に校舎移転のことを記し、併せて私塾開設のことを書いている（傍点筆者、「公私日録」にはこの記載なし）。これが私塾云々のはじめてでてくる記事、しかもただそれだけである。

ところが、前島密の前記「自叙伝」の何礼之が池田筑後守一行の通訳官を命ぜられながら、事故で空しく長崎に引返したことを書いたあとに（長崎引返しは元治元年春、月日不明）つづけて「……………長崎に帰るや、家塾を開き、余を塾長と為し、長崎奉行に紹介し、英学校の学生とし、或は米人ウエベッキ氏に授業を依頼する等、学事上懇篤なる援助を與られたるなり云々」（四四ページ）と何礼之の開塾のことを書いている。これは右の「履歴」の記載と照應するものと解してよい。これで元治元年の私塾開設のことはほぼ確認できるのである。

このように開塾は確認できるが、その規模、カリキュラム等についてはよくわからない。相等の大塾となったことは、塾生が三百余名に達したとあることで察せられる（後掲）。カリキュラムは当時の諸洋学塾と同様のものあったろうからそれでいいこととして、ただ、塾にはたいいてい名稱があるが、この塾は何といったのかその記事が見当らない。名なしであるので仮りに何礼之塾と呼んでおく。

「履歴」を見ると前に引用した私塾開設の記事のつぎに塾生名簿がある。

巻退藏（男爵前島密） 林謙三（男爵安保清康） 中村某（青江秀） 爪生雷吉（爪生震） 其他数十名アリ

とある。何礼之塾はこのように発足をとげたが、優秀塾生も集り、奉行所当局からも好評をほくしたのであろう。その結果、翌慶応元年（一八六六）には、長崎奉行の服部常純から財政的支援を受けて塾舎の新築を行うに至った。「履歴」同年の条に

「服部鎮尹（奉行）ノ後援ヲ得、自ラ邸内ノ空地ニ塾舎ヲ新築シ、専心修学ノ便

一、右は是迄片瀾御役宅ニ而洋学稽古致居候得共、此度右稽古所立山御役所内へ引移、同所へ日々出席致し是迄稽古人世話可致候、就而ハ此度唐通事何礼之介、平井義十郎定役格榊林栄左衛門同様英語稽古所学頭申渡候間、兩人申談修行ハ勿論稽古人引立入念可相い勤旨申渡候

「履歴」文久三年の条には、長崎奉行支配定役格、並に英語稽古所学頭任命のことを書き、稽古所の生徒は幕士及び地役人の子弟及び諸藩の学生、とあるよつて海軍伝習所と同様に、諸藩の学生も入所せしめたものらしい。なお、「履歴」には「尚外交及税関ノ年ヲ取扱て」と付記してあるから、英語教育だけでなく渉外事務も依然興つていたのである。また「履歴」には「但長崎ハ数百年来、外国ノ互市場ナレハ土地ノ人士ハ概ネ通訳ノミヲ専攻シ、向上ノ学業ヲ修ムル者少シ、因テ此奨ヲ革メンコトヲ建議シ採用スル所トナリテ茲ニ至レリ」と付記している。何礼之が定役に挙用され学頭となつたのは、右の建議の結果らしい、但し建議そのものは残つておらない。

さて、「公私日録」には、前に引用した七月十三日の条に引つづいて左の「英語稽古所規則」が掲げてある。これは奉行所の英語稽古所（英語伝習所）の規則書で、当時の英学校のカリキュラムの見本となる。珍しい英学史料であるので全文を左に紹介しておく。

英語稽古所規則

一 毎朝六時〇九ツ時迄稽古有之候事

一 五節句并毎月朔望休日之事

一 学術出来候者は申合毎月七日会讀論講之事

但当日は常例之稽古相

休候事

一 稽古人之内学力見斗（はからい）、毎月十日廿日会読相試候事

一 不時一統学術相試有之候事

一 出席帳日々嚴重ニ相認可申事

但世話取扱可申事

一 出精之者は教授職申請可申立候事

一 不精之者は是亦申請相罪可申事

一 出席致候稽古人粗忽之義は勿論教授職之差図を請丁寧可有之事

一 日々占参之者当番相立火之元取締等都而得想不都合無之様可致事

右之通相定候間相心得事

同年十月五日、英語稽古所において直試を行った。その受験者の名簿が、やはり「公私日録」にあつて四十七名の名があがつているが、このうちに上野景範の名が見出されるので、このとき上野景範は英語伝習所——稽古所に学んでいたことがわかるのである。上野景範は前記のようにその直後に同志と上海密航を企てて長崎の稽古所から姿を消してしまうのである。

ところで、何礼之はこの年も押しつまつた十一月中旬、江戸幕府から思わぬ召命を受けた。それは、幕府が折からの攘夷論の渦中で、横浜港鎖港という難問題に逢着して、その交渉のために池田筑後守一行を欧州に派遣することとなつたのについて、どういう廻り合わせか、何礼之に通訳官として随行の命が下つたのである。これは恐らくその英語の能力が高く買われて長崎奉行あたりからの推薦によるものであらう。ところが、不幸、江戸へ赴く使船の途中故障で延着したため、一行の出発に間にあわず、何礼之は海外渡航の絶好の機会を失

野々山兼寛を派遣したが、その一行中に、後に何礼之の英語の弟子となった巻退藏、後の前島密が加わっていた。⁽⁷⁾

話をさきの英語伝習所にもどすと、翌文久二年、英語伝習所は片瀬郷組屋敷内の乃武館に移され、名稱が「英語所」と改まって中山右門太がその頭取を命ぜられた。⁽⁸⁾これがその翌三年、さらに立山奉行所内に移されるのである。

このようにして、何礼之は英語を解するという能力——しかも外国人について通訳、読書が自由というのであるから、これは当時の長崎でもなかなか得難いタレントであつたので珍重されて——漸次奉行所の外務事務に挙用されるようになった。その英語学習への努力が時をえたので、これが何礼之の出世の糸口となった。かくて文久三年の七月五日、奉行所から明日、麻上下で御役所出頭の令が下った。翌日麻上下着で出頭すると、長崎奉行支配定役格を申付けられた。これで何礼之は正式に長崎奉行所の吏員となったのである。

同六日晴、麻上下着用刻限之通立山御役所へ罷出候処、是迄年行事呼出、町年寄手分此方年番立合ニ而御用人申渡ニ相成来ル処、今日ハ役々立合ニ不及直ニ御書院へ罷出候様御沙汰ニ付罷出候処、於同所御奉行服部長門守(常純)様左之通御奉紙を以被申渡

何 礼之助

常々家学(漢語)并英語兼学格別出精、是迄御用筋正實ニ相勤候ニ付出格之訳を以、長崎奉行支配定役格申付勤候内、新規御宛行三拾俵三人扶持并御役扶持三人扶持役金三拾兩被下之、有難奉存候旨御請申而退出
ついで同月十一日には左のごとく英語稽古所の学頭に任命された。

何 礼之助

平井義十郎

右は英語稽古所学頭申付候、尤漢語家学之義も追而及沙汰候次第も可有之候

亥七月

同時に何、平井の二人が学頭となった。この学頭はいわゆる校長の学頭というよりも、奉行所支配定役格として英語稽古所の事務並びに授業の担当官というものである。何礼之はこれまで「唐小通事助」であつた。同役の平井義十郎もやはり唐通事のほうで、ともに英語を学習した同志であらう、右の任命書には漢語家学之義も追而とあるが、以後その方の申渡しはみえず、英語関係のみであるから、事実上、何礼之は英語のほうの技能によつて奉行所の吏員に用されたと解して宜しかろう。するとこのあたりで英学者としての何礼之がいよいよ独立したものとみることができよう。「公私日録」には

七月十二日、晴、英語稽古所、当分立山御役所内長屋手広之処、壹軒取揃へ当十七日ハ稽古始、今日部屋開ニ而右揃惣出仕

とある。前述文久二年創設の英語伝習所が翌三年七月、立山御役所内の長屋に移され、再び何、平井兩人が学頭となった。恐らく稽古所はここで機構が一新されたのであらう。「公私日録」はつづいて

七月十三日、雨、前御手續之通、兩人(何礼之助、平井義十郎)学頭申付候間得其意、子弟并厄介共之内稽古相願候者は掛りへ可申談候

亥七月、右支配向并町年寄市郷エ右之通申渡候間得其意候て稽古人熟達致候様精々世話可致候

著を『万法精理』と題して訳したことで著名である。十八冊、(明治八年刊)、その他は『政治略原』二冊、(訳、明治四年刊)、『英国賦税要覧』二冊、(訳、明治四年刊)、『世渡の杖』二冊、(訳、明治五年刊)、ベンサム『民法論綱』六冊(訳、明治九年刊)、『開知叢書人事進歩編』上下合二冊(訳、明治十年刊)、『開知叢書人事退歩編』(訳、明治十年刊)等がある。著すところすべて翻訳である。箕作麟祥などと同じ型の西洋学啓蒙学者であった。明治四年末、岩倉使節に随行、後内務大書記、元老院議員、貴族院勅選議員等を歴任して、大正十二年三月二日、八十四歳の長寿を以て世を去った。

何初彦教授から提供をうけたのは、『公私日録』と題する何家の日記と「履歴」である。何礼之の日記は明治、大正を通じてかなりの分量がある。幕末期のものは現在文久二年以降のもの七冊が残っている。⁽⁵⁾このうちまえの四冊が長崎時代で、あとの二冊が江戸に赴いてからである。きわめて詳細とはいえないが、何礼之、ならびに長崎の幕末英学に関しては貴重資料となる。

本稿は何礼之の長崎時代を扱うので、いきおいその家系、生い立ちを述べなければならぬが、何礼之にはまだ小伝すらなく、関係史料は何初彦教授から提供をうけた前記の文書などしかないのです、若い頃のこととはよくわからない。以下は何家の「履歴」による。

何礼之は天保十一年(一八四〇)七月十三日、長崎西上町に生れた。はじめ礼之助、父の静谷は唐通事で、礼之は天保十五年、五歳でその跡を嗣いだ。そういう関係で安政元年、年十五歳で清語を学修した。ところが、いよいよ開国となつて、毎年、露、佛、英、米の軍艦が頻繁に来航するので、概然、外国語

学習の志をおこした。当時、和蘭通詞中には、前記のごとく英語に通ずる者もあったが、従来、唐蘭両通詞は互に門戸をわかつて相譲らず、という有様であったので、唐通事の礼之も和蘭通事に師事することを屑とせず、独学で英語の学習をくわだて百万苦辛の末、英華、華英辞書を在崎の唐人から求めえてほぼ発音文法を習得した(「履歴」)。つまり何礼之は開港による各国船艦の去来に触発されて独学で英語を学習しはじめたのである。それから安政三年(一八五六)、十七歳のとき米人マゴオン、ウィリヤムス、リッギンス、ウォルス、ウエルベッキ等に親炙して、通訳、讀書が自由となったという(「履歴」)。こうして一人前の英学者となったのである。安政三年には、八月アメリカの特使ハリスが下田に来てやがて通商条約締結の交渉となる。翌四年正月、江戸で蕃書調所が開所し、その翌五年六月には、十九日、江戸湾小柴沖で日米修好通商条約が調印され、翌六年六月からいよいよ通商貿易の開始となった。

長崎では、前記したように、この通商条約の調印を機として、英語伝習所が開かれているが、何礼之が英語を独学で学習をはじめたのはその二年ほど前であった。ついでいよいよ安政六年六月、日米通商条約によって横浜とともに長崎が正式の通商開始となると、税関業務に従事を命ぜられた(「履歴」)。これは習得の英語が役立って挙用されたのである。このとき年二十歳。それから翌々文久元年二月以降、ロシア軍艦の対馬の一角占據事件が勃発すると、長崎奉行は現地からの急報によって、支配組頭永持亨次郎を派遣して退去交渉に当らしめているが、このとき何礼之は通訳として随行を命ぜられ、帰ると金三両の褒賞をうけた(「公私日録」)。このときは、江戸幕府も事件を重大視して外国奉行

久三年十月の条にその名がみておって、奉行所設立の英語稽古所に学んでいたことがほわかった（後述参照）。ところで、上野景範はこの文久三年の冬に、雄心ぼつぽつ洋学研究のために欧行を企て、まずアメリカ船に投じて上海まで脱出した。ところがたまたま同港に寄港した遣欧使節池田筑後守の一行につかまって、空しく再び長崎に送還された。これは国禁を犯した海外脱出であったのでその罪は重かったが、藩当局はこの罪を問題とせず、暗に壮挙とした。かくて上野景範は同年四月、帰藩して七月には藩の開成所の八木稱平、石河碓太郎の試験を受けてその句講師となっている、つまり公然と仕官を許されたのであったから、これは薩摩藩としては幕府を無視した処置であったが、当時の薩摩藩はやがてやはり幕府の禁ずる独自の遣英大使節を派遣したほどで、上野景範の密航も罪としなかったのである。むしろ、その英語の学習の成果が高く買われたのであるから、曾て藩命で長崎に赴いて蘭学、英学の学習を行った結果がこの任命となったのであるといえる。こうして開成所の教官となって、森金之丞（有礼）、市来勘十郎（後松村淳蔵）、岩山宗八（敬義）、高橋四郎左衛門（高橋新吉）、原田宗英（原田宗師）その他に英語を授けた。このうち高橋四郎左衛門と原田宗英の二人は慶応元年、長崎の何礼之塾に入門している（後述参照）。上野景範の帰藩と開成所の句読師就任とは長崎の、とくに何礼之塾の英学の鹿児島移植であると同時に、その後輩をさらに長崎の何礼之塾へ送り込む役割を行った。こうして長崎と鹿児島との英学の本家分家関係は確立したのである。

二 何礼之と幕末の長崎英学

長崎における英語学習は幕末となってようやくはじまったのではなく、その由来を遡ると文化年間頃からすでにきざしていた。文化五年には、英艦フェートン号が突如、長崎港外に姿をあらわし、港に侵入を許したためにときの長崎奉行松平図書頭康英が責を負うて自刃するという不慮な事件がおこった。それから対英警戒が厳重となり、同時に英語への関心も高まった。かくして長崎における英語研究が蘭通詞の間でまずはじまった。この時期の長崎英学については豊田實氏の『日本英学史の研究』（昭和十四年刊）、古賀十二郎氏の前掲『長崎洋学史』上巻、「語学」の部に詳細な考証がある。このいわば創始期の長崎英学はしかし、蘭通詞の余課としての彼らの間のごく限られた学習であった。ここで問題となるのはこの創始期でなく、幕末開港以後の日英、日米との外交、通商開始期のもので和蘭語に代って英語がいよいよ国際語となったためにはじまっていたいわば本筋の英語学習である。具体的には安政五年（一八五八）七月、すなわち日米修好通商条約調印の翌月、長崎岩原屋敷内の奉行支配組頭永持亨次郎役宅に設けられた英語伝習所の開設によるもので、蘭通詞檜林栄左衛門、西吉十郎の二人がその頭取となって、これからひろく幕上、地役人子弟らの英語教育がはじまった。伝習所には在長崎の和蘭人ウィッヘルス Jhr. H. O. Wichers、同デ・フォーゲル De Vogel、英人フレッチャー L. Fletcher などが相ついで教授嘱託となっている。英語学校として内容も充実しておって、つまりこの英語伝習所開設以降が長崎の幕末英学となるのであるが、この英語学習に多大の貢献をしたのがほかならぬ何礼之であった。⁽⁴⁾

何礼之（が・のりゆき）は明治初年の洋学者として、モンテスキューの主

とそうではないので、蘭学を通じた西洋文物への関心から英学に対する触手もすでに動いていたのである。この英学に対する幕末期の触手の動きの先駆はまず安政年間における上野景範の長崎遊学となつてあらわれた。

上野景範は明治初年に外交官として活躍した薩藩の生んだわが外交界の先達の一人である。薩藩は明治初期の外交界に寺島宗則、森有礼、鮫島尚信、吉田清成らの優秀な外交官が輩出しておるので、上野景範もそのうちに数えられる。ところが中道にして病み斃れたために、寺島、森などのように著名でない。しかし、外交界のことは別としても、鹿児島英学史の上では草わけを行ったという功績は特筆に値するのである。

上野景範は弘化元年（一八四四）十月一日、鹿児島城下塩屋町で生れた。祖父は阿多郡田施郷の郷士であつた。幼名定次郎、後に敬介と改名（履歴書による）。景範にはまだ伝記もなく、上野家には若い頃のことについては、この履歴書以外に何らの史料もないので、履歴書記載以外のことはわからず、また履歴書の記載の裏づけになるようなものもないので、これによるほかない⁽²⁾。そこで履歴によつてたどると、嘉永二年四月、六歳のとき藩命で清国語の稽古を命ぜられている。これは父の泰助景賢が藩の清国語の通訳官であつたからで、その後をつぐためであつた。景範は親の代から外国語の学習と縁が深かつたのである。ところが安政三年（一八五六）のときに藩命が變つて、長崎遊学を命ぜられ、蘭学、ついで英学を修行することとなつた、これが景範の生涯を決する転機となつた、このとき十三歳であつた。履歴書の記載は

安政三辰丙（十三歳）、四月、学資三人賦（一ヶ年米五石四斗金拾八両）並ニ銀三拾七枚

半ヲ藩ヨリ受ケ、長崎ニ抵リ訳官本間某ニ就キ蘭学ヲ修メ後英学ニ移ル

記載はこれだけで、ほかに傍証となるような史料はなにもないが、とにかく父祖以来の清国語と縁が切れて西洋関係の新しい道が開けたのである。この上野景範の長崎遊学は重要であるが、その藩命の由来は明らかでない。安政三年といえばアメリカその他の国々と和親条約の締結が行われて、幕府は開国へいよいよ踏みきつた頃である、このような時代の転換がこの藩命の背景にあつたことは否みがたいであろう。しかし、訳官（通詞）本間某とはどういう人物かなどまだ突きとめられない。さらに英学への転向の動機の具体的な究明もこの際重要な意味があるのであるが、この点もその事情ははっきりしない。景範は翌々五年八月一旦帰鹿して文久元年八月、再度長崎に赴いて「復英学ヲ修ム」とあるから安政五年八月、長崎を去る以前に英学へ移つていたことが推定できる。この安政五年は、福沢諭吉が、横浜の開港に赴いて、もはやオランダ語が国際場裡に通用しないことを感得して、蘭語から思い切って英語に転換した年である（『福翁自伝』）。上野景範の長崎における英語学習の開始事情は、このようにその契機ははっきりしないが、福沢より早く、蘭学から英学へという時勢の推移に敏感に反応したものであつたことはまちがいない。そこで鹿児島における幕末英学勃興の導火線もこの上野景範の長崎における英語学習にあつたということがいえるであろう。

とはいふものの、長崎における上野景範の英語学習の具体的なことは上野家の資料ではこれ以上のことはわからない。つまり何処で、誰に学んだのか皆目わからない。ところが最近、何初彦教授から、何礼之の日記の提供をうけ、文

幕末英学史における何礼之

——とくに何礼之塾と鹿児島英学との交流——

大久保 利 謙

はじめに

私は去る昭和四十六年七月発行の『長崎談叢』第五十一輯に「幕末の長崎と上野景範——長崎と薩摩の文化交渉史の断片」を掲げた。これはたまたま、友人の上野景福教授から上野景範の詳細な履歴書と文書類の提供をうけたのがきっかけであった。上野教授は景範の嫡孫であり、右の小論は主として上野景範の長崎遊学のことを書いたのであるが、同時にこれは鹿児島英学発祥の研究というようなものとなった。幕末における鹿児島と長崎とは政治、経済の面で密接であるが、さらに文化の方面においても本家分家の関係密なるものがあつたことがわかった。そこで鹿児島英学の発祥史をさわめるには、どうしても本家の長崎における幕末英学的情況を説明する必要がある。ところが、この長崎の幕末英学については古賀十二郎氏の『長崎洋学史』（上巻、昭和四十一年刊）に簡単な記載があるが、これは年代代表的なもので、その実態を明かにするものではない。今回、何初彦教授の御好意によって幕末長崎の英学者時代の何礼之に関する資料を調査することができたので、上野景範文書などと併せて幕末長崎の英学的情況、とくに奉行所設立の英語稽古所のことなどを若干明かにする

ことができ、さらにこの長崎英学と鹿児島との交流関係についても少しく具体的な経緯を知ることができた。そこで、上記の表題の下にこの問題について述べてみることにする。この交流はじつは長崎からの波及で、鹿児島における英学、または英語教育の発祥史となるものである。しかし、このような本家分家の関係はひとり鹿児島英学の場合のみにかぎらないであろう。その他の地方藩にも長崎を源泉地として、幕末明治初期に英学が普及した場合も少なくないであろう。鹿児島の場合もその一つでしかも典型的なものであつたのである。

一 上野景範の長崎遊学

幕末における鹿児島英学の起原は、当時の薩英関係がその背景にあることはいうまでもない。この幕末の薩英関係は、幕末史上の展開の主なポイントになるもので、これは『薩藩海軍史』、『鹿児島縣史』等にも詳しく扱われているのでここで再説する必要はない。薩英の急速な接近が文久三年（一八六三）の薩英戦争にあつたことも周知のことである。したがって英学の発達もやはり薩英戦争以後ということになるが、しかし、それ以前には全くなかつたかという